

P-005

コロナ禍における子育て支援施設の利用状況に関する実態調査

篠原 理恵¹、桑原 さやか¹、村越 春那²¹ 東京医療学院大学 保健医療学部 看護学科² 順天堂大学 医療看護学部

【背景・目的】

近年、市区町村子ども家庭総合支援拠点の法定化をはじめ、子育て家族の包括的・継続的な家庭支援が求められている。女性の社会進出に伴い、子育てをめぐる環境は変化しており、コロナ禍の影響もあることから、多様性のある家族状況に応じて、子育てを社会全体で支えていくことが重要となっている。各地域において、その実情に合わせて支援内容が検討され、支援事業としての役割や機能を模索しながら実施している現状がある。今後、支援事業の展開の工夫に役立てるため、多様な母親の育児状況を把握し、求められている子育て支援と課題を検討することを目的とした。

【方法】

調査は、神奈川県内6施設および都内2施設において、乳幼児向けイベントに参加した母親に利用状況のインタビューを実施した。主な調査内容は、施設の利用頻度、他の施設の利用の有無、施設の活動内容、利用時の利点欠点等とした。本研究は、各施設の代表者と母親に任意性の保障、個人情報保護等を説明し同意を得て実施した。

【結果】

乳児の母親(n=43)、幼児の母親(n=18)であった。施設の利用頻度は、月2、3回(乳児12人幼児9人)、週1回(乳児19人幼児7人)、週2、3回(乳児9人幼児2人)、週3、4回(乳児3人幼児0人)であった。幼児は、民間の子ども関連施設も利用していた。各施設の活動内容は、ベビーマッサージ、ヨガ、おはなし会、自由に遊べる日、外で遊ぶ日、助産師相談等であった。施設の利用は、地域の子育てに関する情報収集や子どもとの遊び場となっていた。施設利用の開始は、一番遅い人で1歳1ヶ月となっていた。コロナ禍で予約制の利用となり、安心して利用できる反面、同じ月齢の友達との出会いが少ないことや予約が取りにくく自由に行けない不便が欠点として語られた。

【考察】

コロナ禍において行動制限により出控えが進み遊び場も減少した為、施設は遊び場としての利用が多くなっていったと考える。共働き家族が多く、幼児になると、保育園や幼稚園に行くようになるため施設の活用は減少していくと考えられた。SNSでの情報収集は進んでいるものの、子育て支援施設では、実際の子ども関連施設の情報、保育園に関する情報など、地域の実情などの情報を求められていた。親の働き方や住環境などの利点欠点の具体的な情報と同年代の友達づくりも求められており、気軽に利用できるようなシステムの工夫が必要であると考えられる。

P-006

在籍保育所における親子療育教室の意義—第5報—発達の気になる子どもをもつ親の育児ストレス調査

橋本 かほる¹、竹内 恵子²、津田 明美³¹ 京都先端科学大学健康医療学部² 福井大学教育学部³ 福井県こども療育センター

【はじめに】

福井市では、特別な配慮が必要な子どもへの支援を強化する柱の一つとして、公立保育園の研究指定園における親子療育教室(教室)の研究を2012年から継続し、今年度で11年目となる。療育の対象となる発達の気になる子どもについての発達のアセスメントには、行動観察、発達検査などを用い、包括的な評価が可能である。一方で、親の内面へのアセスメントは現場の保育士にとって課題とされており、具体的な保護者支援につながりにくい。そこで、親の内面的なストレス状況を調査し、育児ストレスが高い親について、親の育児環境や就労状況、親が気になる子どもの発達特徴からその背景を考察したので報告する。

【目的】

発達の気になる子どもをもつ親の育児ストレスについて日本版PSIを用い、親のストレス状況を調査し、親自身の状況や子どもの発達プロフィールから検討を行った。

【結果】

対象者(親)10名の平均年齢は35.1(30~40)歳、全員が有職者であった。子どもの人数は2名から5名で中央値は2名であった。家族構成は核家族5名、拡大家族5名であった。育児支援者は有り7名、なし3名であった。妊娠中・出産時から退院までの経過について6名の親に何らかの記載があった。

PSI総点の平均値は182.4(±34.2)で育児ストレスが85%以上の高値であった親は11名中2名で全体の18%であった。子どもに関するストレスの平均値は92.2(±12.2)で、ストレスが高値であった親は11名中1名で全体の9%であった。親に関するストレスの平均値は100.3(±25.1)で、ストレスが高値であった親は11名中2名で全体の18%であった。2名のうち1名については子どもに関するストレスについても高値であった。今後専門家の介入も視野に入れた育児支援の必要性が示唆された。

また、下位項目では「退院後の気持ち」に高いストレスがある親の80%に妊娠中・出産時から退院までの経過で何らかの記載があることがわかった。子どもに関する下位尺度の項目数が親に関するものより多かったものは82%であった。「子どもの機嫌の悪さ」については63%の親が高いストレスを示し、その内容として目覚めの悪さや拒否反応が強いという子どもの行動特徴が示された。今後、育児ストレスをふまえた親支援に向けてデータの蓄積と保育士の親理解と対応という側面からの検証が必要である。